

二〇一九年度講習会 劇作分科会優秀作品

「隠し味」

小松 萌（B地区 山田高校 3年）

登場人物

・男

・女

二人は夫婦。

舞台

リビング。ソファとテーブル。

ダイニングが見えるタイプのキッチン。

ソファの前に小さなテーブル。

明転。

男と女、ソファに座っている。

女 だってあなた、私をだましたでしょう。

男 なんだよ急に。

女 いや、そんなセリフがあったなああって。

男 セリフ？お前、劇とかやってたっけ？

女 いいや、やってないよ。ただ、どこかで聞いたことがあるなって。

男 そうか……。

しばしの沈黙。

男、立ち上がり

男 もうこんな時間か……そろそろ晩飯の用意してくれないか。

女 そうね、何が食べたい？

男 久しぶりに俺の好きなオムライス、作ってくれよ。デミグラスソースの。

女 オムライス……良いわ。作ってあげるからそこで待ってて。

男 ありがとうな。

男、テレビをつける。

バラエティーらしき声が聞こえる。

女、台所へ向かう。

女 オムライス、最後に作ったのいつかな。

男 あれだろ？三カ月前、俺の誕生日に。あの時、ケーキも作ってくれたんだっけ？

女 そうよ。あなた作るの難しいケーキ好きだから諦めようと思ったの。

男 難しいって言いながらすぐく美味かったんだよな。

女 ふふふ。ありがとう。

女、作業に戻る。

男、携帯を取り出し苦い顔。

女 ねえ。

男、びくつく。

男 な、なに？

女 去年の今頃だったかなあ。伊勢まで二人でお参り行ったの。

男 そう……だったかな？

女 今年もどっか旅行したいな。

男 そうだな。どこが良いかなあ。

女 私、海外行ってみたい。

男 海外かあ……パスポートとりに行かないとな。

女 うん。ハワイとかドバイとか、ありきたりだけど、ほら私たち新婚旅行も国内だったじゃない？

男 仕事も落ち着いたし、今年に行くか。

女 ほんとに？嬉しい。ありがとう。

携帯の着信音。

男 ごめん、職場から。ちょっと出てくる。

女 うん。

男、別の部屋へ

女 今日はいつもあり美味しくできそう。

男、別部屋にて会話

男 家にいるときはかけてくるなって言ってるだろう！寂しかった……ってもうわかった俺も言いすぎたよ。泣くなつて。今週末も出張って言ってるからさ。気にするなって……愛してるよ。

男、電話を切る。ため息。
机にはオムライスが並んでいる。

女 大丈夫だった？何だか声を荒げてたように感じたんだけど。

男 部下が仕事でミスをしたんだ。

女 そう。ご飯できたから食べましょう。

男 おっうまそう。サンキューな。

女 いいのいいの。……いっぱい食べて。

男 いただきます。

男、オムライスをほおぼる。

男 やっぱりお前の作るオムライスは最高だなあ。天才だよ。

女 おおげさだなあ。大したことじゃないよ。

男 いつもより美味しい気がする……なんか変えた？隠し味とか。

女 まあね。

男 何入れたの？

女 ナイシヨ

男 ええ、まあいいや。美味しいし。

女 ねえ、あなたのお父さんってずいぶんモテたらしいわね。

男 親父？ああ、なんだかそうらしいな。

女 この間、お義母さんが家に来た時話して下さったの。

男 そうなんだ。なんて？

女 それでお義父さん、言い寄って来た人を邪険に扱えなくてなあなあにしちゃってたんだって。それは結婚してからも変わらなかつたらしい。

男 へ、へえ。親父、そんなだったんだ。

女 お義母さん、最初の頃は可愛いもんだって許せたらしいけどついに我慢できなくなつて

男 で、どうしたんだ……？

女 料理にこっそり下剤を入れたんだって！ふふふ、おっかしー。

男 はは……そうだな。

男、顔がひきつる。腹部をおさえて必死に我慢している。

女 はあーあ。そうだ。旅行の話、どこ行こうか。

男 か、海外……。

女 ハワイかドバイか、よね。どっちが良いかなあ。だって旅行なんて三年ぶりだもんね。

男 ……え？さ、三年？

女 うん。三年だよ。

男 え、だってさっき去年って……。

女 あなたは行った。私は行ってない。誰と行ったかぐらい覚えといてよね。

男 お前……何言って。

女 営業部のカオリちゃん、だっけ？

男 なんて、それ。

女 そういうところはお義父さんゆずりって？あははっ笑っちゃうね。遺伝子は逆らえないってやつ？

男 まさか、下剤を。

女 そんなことしてないよ。下剤なんて入れるわけないじゃん。

男 そう、なのか？

女 うん。下剤、はね。

男 は？

女 お義母さん、優しいよねえ。下剤、で許してあげちゃうんだから。

男 な、何を入れた？

女 致死量は入れてないはずだけど、わかんないや。味、誤魔化すの大変なんだよ。

男 俺、死ぬのか？

女 申し訳ないけどそれはわからない。でも私はお義母さんほど寛容じゃなかった。

男 ……かはっ。

男、吐血。

女 嘘が下手な自分を責めてね。私だって最初は気がつかなかったしあなたを信じてた。あ

なたはそれを良いことに浮気をやめなかった。

男 ……すまない。

女 ああ思い出した！お義父さんも下剤を入れられたときは同じように謝ったんだって言

ってた。その時、お義母さんが何を言ったのか……。

男、もうろうとしながら女を見る。

女 「だってあなた、わたしをだましましたでしょう。」 ってね。

暗転。

幕